

集団遊戯療法に関する一考察

岩堂美智子・宇高智恵子・大辻紀代子・木村晴子

A Study on Group Play-therapy with Children

MICHIKO IWADÔ, CHIEKO UTAKA, KIYOKO ÔTSUJI AND HARUKO KIMURA

はじめに

集団心理療法（Group Psychotherapy）は、心理療法のひとつの発展の方向を示すものである。それは個人療法の限界を打開するための新しい場を提供する。集団効果が期待されるクライアントにとってのみならず、集団心理療法の研究およびその実践は、年々増加するケース数と治療施設の不備・要員不足の問題を少しでも解決するためにも必要なことである。

しかしながら、1対1の個人療法に比し、集団療法は、いかなるクライアントをグルーピングするか、co-therapist システムをとった場合のチームワークの問題、親のグループに関する問題など、危機をはらむ課題が多いことも事実である。これらの解決の方向を探りながら、実践による治療理論の検討をかさねることは、心理療法一般のあり方を研究する上でも重要であろう。心理治療家は、治療技法の開拓とともに、複数の人間の相互作用が生む新しい人間関係にも目を向けていかなければならない。

さて、Axline, V.M.⁽¹⁾は、Rogers, C.⁽²⁾が提唱した来談者中心療法の立場にたち、子どものための遊戯療法を發展させ、さらに同じ原理にもとづいて集団遊戯療法をも実践して効果をあげている。Axline と同じ立場になつ Hobbs, N.⁽³⁾は、集団心理療法の重要な点として「集団そのものの持つ治療力を解放するかどうか」ということが決定的であると言っている。集団心理療法においては、セラピストの理解と受容に支えられた各メンバーが、集団の場において人間関係の新しいあり方を発見していくこと、また、自己の問題を集団場面においても表現しようようになり、集団の中から刺激や受容をうけつつ、新しい自己を創りだしていくことが特徴とされる。

このように、基本的には個人療法と同じ理論にもとづきながら、集団のもつ機能と効果を最大限に活用することをねらいとして、われわれもまた、子どものための集

団遊戯療法を実施し、その過程の分析を試みてきた。本研究でとりあげた事例は、年齢も性も異なるグループであり、それぞれ複雑な家庭の背景および生育史をもった子どもたちである。セラピストの側もまた担当者1人の時期、2人になった時期、新しい者が加わった時期など変則的な対応をしている。これらの条件が治療過程にどのような影響をおよぼしたか、を考慮しながら、集団心理療法の理論と実際について考えていきたい。

目 的

知恵遅れで、対人関係と情緒的な問題を併せもつ、3人の子どもの、集団遊戯療法の過程を分析し、グループダイナミックスおよび集団遊戯療法の効果的なあり方について考察する。

手続きおよび方法

資料：

昭和49年4月4日～12月16日の期間、週1回50分間、計25回実施した集団遊戯療法の過程の状況録音と逐語記録、および各回の参加者の相互関係についての記録（セラピストがプレイ終了後毎回記入）を資料とする。

クライアントについて：

X……13歳（中学1年）男児 養護学校在学 知恵遅れ 人とつながりがもちにくく遊べない、無気力であるとの主訴 固執傾向が強い 3人兄弟の長男 脊椎そく彎症を有する。

Y……9歳（小学3年）男児 養護学級在籍 情緒障害、自閉的傾向があり対話ができにくいとの主訴 IQ 60 一人っ子 母はC・P後遺症で言語障害がある。

Z……9歳（小学3年）女児 普通学級在籍 学業不振 IQ 58 社会性未発達 遅れが目立つので養護学級に入りたい、養育上の不安があるとの主訴（継母） 一人っ子

集団の構成：

クライアント（以下 *cl* と略す）は X, Y, Z の 3 名、セラピスト（以下 *th* と略す）は A, B, C の 3 名である。各回における参加者の推移は表-1 の通りである。

表-1 メンバーについて

回次	第1回～5回	第6回～13回	第14回～17回	第18回～25回
<i>cl</i>	X, Y	X, Y, Z	X, Y, Z	X, Y
<i>th</i>	<i>thA</i>	<i>thA, thB</i>	<i>thB</i>	<i>thB, thC</i>

- (1) Z は第6回から新たに参加した。それにとまって、*thB* が新しく加わる。
 (2) *thA* は第14回以降都合によりプレイに参加できなくなり、*observer* に転向。
 (3) Z は第18回以降来所しなくなった。
 (4) 第18回以降、X と Y のプレイが活発で、*thB* のみでは対応できないので、新たに *thC* が参加する。

なお、母親のグループカウンセリングを同時に実施し、カウンセラーの経過報告を追加資料とした。

整理の方法：

1. グループの中の *cl* どうしがいかなるかわり合いを展開しながらセッションを重ねていったかに焦点をあてて整理をおこなう。
2. *th* の理論的立場（来談者中心療法）が、実際の治療過程の中でどのように生かされ、効果があったかを検討する。
3. *th* の問題、セラピの諸条件、親のカウンセリングについてなど、Group Therapy の問題点に関して事例を通して考察する。

結果および考察

1. グループ・ダイナミクスについて

まずはじめに、治療過程の回を追いつながら、クライアント各々に焦点をあて、個々の *cl* にとって、いったいどの *cl* のどのような行動が影響を及ぼしたのか、さらに *cl* 個人の内的変化にとまって、他児へのかかわり方はどのように変化していったのかを見ていきたい。即ち、*cl* の変化の要因を考察するにあたって、ここでは、Group Therapy の過程の中でみられた *cl* どうしのかかわり合いを重視してみる。

1. 治療過程の概要

表-1 に示されるように集団の構成に変化があった時期を区切りとして、25回のセッションを四期に分け概要をまとめた。

第1期（第1回～第5回） 子ども2人、*th* 1人でスタートする。年令も背丈も Y に比べて上位の X であるが、セラピ開始当初は、終始 Y に気おされ気味であった。play room 狭しとめまぐるしく動き、大声でひとりごとを言ったり、*th* に話しかける Y は、まるでこの部屋の主人公は自分一人といった感じでふるまう。ピアノをひいて歌をうたう、指人形遊びをする、プラレール遊び

をするなど活発な Y は、「ねえちゃん、ねえちゃん」とたえず *th* に呼びかけ *th* の注意を自分の方にむけておきたがる。一方 X はほとんど無言で、居場所も変えず動物玩具をいじくったり、手にした玩具を放り投げたりしている。*th* が話しかけると「イヤ」「アカン」と拒否的な返事をするのみ。終了まぎわになると、X は「もっと居たい、泊りたい」と言い、手でもてあそんでいた動物のミニチュア玩具を服のポケットにつめ込み、第3回目には *th* の制止をきかず、持って帰るのだといって母親の待つ counseling room までそのまま逃げていった。この動物玩具を家にもって帰りたい、という意欲を表現しはじめるころから X のエネルギーも次第に外に向かって表出されるようになり、*th* をめぐっても Y と互角に張り合うようになる。

Y は遊びがうまくいかない時など特に、*th* に傍へ来てはしがり、何かと手助けしてもらいたいのだが、段々 X が強くなり、*th* を占領しようとするので思うようにいかずとまどう。第5回目、Y は X の強引きにあきれるとともに、X の急速な変化に目をみはるようになる。

第2期（第6回～第13回） 新たに Z が加わり、子どもは3人になる。それにとまない *th* も1人ふえる。X は新しい人間が一度に2人もふえたためか、最初の回のようにしばらくは遠慮がちにふるまう。一方、Z は緊張感なくごく自然に play room にとけこみ、ままごと遊びや、描画、指人形遊びなどする。Z は他児に対しても臆せず積極的に働きかける。

第1期に、*th* をとり合うというかたちでむき合っていた X と Y は、第2期になると、直接口げんかをするようになる。X はさまざまな遊びを展開する Y、Z 各々の動きに十分関心をもっており、後半には Z の遊びに刺激されて水遊びや野球など、身体を活発に動かす遊びをはじめ。他児に自分の方から働きかけることはしないが、他児が休むとすぐ他児のことを気にして *th* に問う。また X は *th* には直接身体攻撃を加えることが多いが、他児に対してはもっぱら受身で、玩具を横取りされても無抵抗である。

Y は、積極的に一緒に遊ぼうとかかわってくる Z に対してどう対処していいかわからず最初は攻撃、拒否行動にでる。自分の遊びを続けることに夢中で、それがうまくいかないヒステリックになる Y であったが、Y 自身にも興味のある遊びを次々活発に Z がするのを見て、次第に他児の遊びや動きにも注意を払うようになる。まだ直接スムーズに他児とかかわることはできないが、自己中心的な発言の他に他児の遊びを理解した発言（声援のような）もでてくる。

Zは、新しく参加したhBに支えられて、男児2人が、構成していた荒々しい雰囲気におおくれることもなく、最初からいろいろな遊具に関心を示し、活発に遊んだ。彼女はhとやりとりするだけでなく、他児とも一緒に遊びたいという意欲を示し、他児に直接かかわっていき、また他児がhとやりとりしているところに自分なりに参加していった。嫌がらせをするようにしつこくhを攻撃するXの行動に「何でやろ」と不思議がったり、hを助けようとXを攻撃したりもする。またYの特異な言動に驚きながらも一緒にはいしゃいだり、まねをしたりして相手と共通の場をもとうとする。

第3期（第14回～第17回） 夏休みで第2期との間に約1ヶ月間隔があく。Xは親しんでいたhAがこの期より休んでいることと、しばらく休暇があったためか、再びはじめの頃のようにおとなしくなる。が、間もなく勢いをもりかえし、hBにニヤニヤしながら攻撃をはじめめる。この第3期になるとYとZがきこえないながら一緒に遊べるようになってくる。ZはYに対し許容的でお母さん役。Yの方も「Zちゃん、お母さんみたい」と愛着を示す。さらに、Yは次第にXの威圧的な行動に接して、その強さを認めるようになり、「Xくんは大きい、もうすぐお父ちゃんになる」などとひとりごとをいう。対抗して負けずにやりとりはしているものの、一方で、年長のXに一目置くYである。

第4期（第18回～第25回） 子どもたちの活発さにhB1人では対応しきれないので新たにhCが参加することになる。ところがZが来所しなくなり、実質的には2対2とclとhの数と同数になる。Xも今度は新しいhCにすぐ慣れ、hにもYにも力強いことばを投げる。積極的に自分からYのことばをまねて茶化してみたりする。Xが野球遊びに力を入れた。その熱心さにYがつり込まれ、自分の遊びをやめてXに交替を求め、野球をしだす。Xは口ではYを罵倒するが、自分が野球遊びをしている時は別の遊びをしているYにボールがあたらないよう配慮するなど思いやりがある。またYの体当たりの遊具の横取りや攻撃行動には反撃しない。Yの方も初期の頃のようにXの相手をするhを一方向的に自分の方にとりかえそうとするのではなく、自分はそれを見て行司や応援役になって2人に声援を送ったりするゆとりができる。

2. 各セッションにおけるクライアント同士のかかわり

（表-2,3,4,5,6 参照）

3. 各クライアントの行動像の変化について

(1)Xについて

初期、play roomで、じっとすわっていたXは、他児の動きを見ていることが多かった。どんなふうに分

気持を表現すればいいか、とまどっているようす。hに對しても遠慮がちで、積極的にかかわってくることの少ないXであった。しかし、そんなXにとって、突拍子もない形であるが、「ねえちゃん、オッパイくれるかい」と、歌うようにhにかかわろうとするYを見ることは、hへの積極的なかかわりをもつきっかけとなったと考えられる。（それは、初期には、Xの場合は、hへ玩具を投げたり、hに攻撃したり、という形で表現される。）

Yが、hに「おっぱいちょうだい」というのを聞いて、ニヤニヤ笑い、また、Zが、ままごとや、ごっこ遊びをし、カバンをもって学校へ行くまねをしているのを見て笑うX。はじめ、Xは、ミニチュアの動物玩具いじりや、動物玩具を投げる遊びのくり返しが多かったが、play-roomの中でくりひろげられる他児の遊びを見たり他児の活発な動きに、次第に誘惑され動きだすようになった。たとえば、Xが、動物玩具とは違った遊びをするきっかけとなったのは、Zの水遊びにつられてであった。その時のXは、水をおもちゃのバケツに汲んで、その水を飲み、hにも飲むように命令するのであった。そしてさらに、ゴミ箱に水を入れて、いっぱいにし、ピストル玩具と、象の玩具をその中に入れた。またXが、中期以降、毎回続けている野球遊びは、Zが、hとの間ではじめた時に、交替をしてX自身も遊んだのが、きっかけである。このように、他児の遊びは、Xが、動物玩具いじりには飽きたが、他にすることがなく、じっとすわっている時期に、Xの目に映っていたのである。いってみれば、それは、Xの固執的な動物玩具いじりを、X自身でふっきるきっかけとなったともいえる。

Xと他児との関係で、もうひとつ見落せない点がある。Xの攻撃的な行動は、ほとんどhに向けられ、他児には、向けられていなかった。つまり、他児とのかかわりの中で、積極的に自己を表現するということは少ないXであった。しかし、他児の積極的なXへの働きかけで、消極的ではあるが、しだいに自己を表現していくようになる。初期は、Yが、Xを非難した時に、ことばで言い返す程度のかかわりであった。玩具を他児に取られても、とり返すことはなく、自己を過度に抑圧している感じであった。しかし、Zが、半分はXにかかわりたいという挑発的な態度で、Xの投げたものを投げ返してみたり、足をたたきに行ったり、Xに近づいていって、オーバーに、Xのもつへびの玩具をこわがしてみたり、などしてかかわっていくと、Xは、彼なりの自己表現をするのである。最初は、Zに対しては、何も言わず、あとで、パンチキックを強く蹴り、回を追うにしがたい、次には、Zの遊んだあとの、ままごと道具を小部屋の中に投げ込

表-5 第2期、第3期のZ児を中心に

Xとの関係(主にZからみた)	周 知	Yとの関係(主にZからみた)
Xの通んでいる方に近づいていき、動物玩具を横でまわっている。平行遊び。	6	Yの指人形に自分も指人形でかかっている。指人形で、指人形をたななれるが、負けてはたさかえず。
hを困らせるように見えるXをみて「なんでやろ」「おからんわ」とひとりごと。 Xの投げた玩具をひらいてXに投げ返す。	7	(Y欠 席)
Xが退出時になっても帰らないと、hに言っているのを聞いて、hにそれに対する叱責を言う。	8	最初ツラレール玩具で通んでいたが、Yが替わってほしそうなのでゆずってまことをする。Yの抱えている線路をみつめて遊す。
本児(Z)欠 席	9	本児(Z)欠 席
退出時、居残るXを戸口でまわっている。 Xを呼びに行く。	10	Zの持っているクレパスを箱の中に入れていけ言えずにいるYを察して、自分からさし出す。
Xが投げ入れた玩具を砂箱から投げ返す。Xに対してもしやと思う行動を隠す。Xがhに砂をかけた。攻撃的なを「なんでかな」と言う。 Xがクレパスを「スゴイ、スゴイ」	11	Yといっしょに砂をかく。なぞを出してhを通してYに寄せてほしいと言ったり、Yのへび遊びに怒かってほしやうと、Yにわかろうとする。Yがみられる。Yのへび遊びに「だいじょうぶかな」といったり、hの指人形をへびでまわすYに「だめとき」という。
Xがゴキブリを入れた木をひしゃくでおもしろがるようにみ出す。 hをへびでこわらせたり、攻撃的なをみてhを助けるという形でXに何度もかかわっている。	12	前履するXに気をとられて今回は、Yに対して前履的。
最初は野球の審判という形でhとXの野球にはいる。ドッチューにももつターにもなる。 ターになりたとき、「かわつて」とXに言い、バットをとる。 Xがボールをうまく打つてを見て「ワースト」と言い、Xのしるキックを何度もたたいておくと、「やめときなさいから」と自分の思うとおり言っている。	13	Yと力で「ちゃんばら」をしない乙ば、Yの背中を力できりつけることによってきそおうとする。Yがhに言わせたことを自分の「いっしょに言った」「おっぱいくれるかい、はいはい」の「はいはい」の部分でYにみせたり。何かとYにかかわっている。Yがhにおんぶされるのを見て、きそく「自分も」にhに要求。
本児(Z)欠 席	14	本児(Z)欠 席
へびの玩具を口にくわえたりするXに「あんなことしてはいる」という。 前回Xがしていたゴキブリの中の水を入れる遊びをする。	15	ビニールとコーキを、横でみていたYにあげる。チャームバーのバチをくれというYに「だめー」とかきない。Yがチャームバーを点検すると、あきめて、他の遊びに移ったり、まことをYに促されて「まあ、いいわ」とYの指人形にこねを食べさせたり、カゴの取りあいでは最後、砂場遊び半分はYの指人形に砂をかける。
hに攻撃するXに対して「ダメよ、悪いことしたら」と自分は、hの味方になり、ヘルメットをかぶってXをやっつけにい。Xが年上だということにおかまいない。 XがZの輪かけを見て「へたな」というと「そんな、言うんやったら、自分でやってみい」負けでい。	16	Yからの一方的な働きかけに対してしる柔軟に「私、お母さんだもん」とあそびの中ではもっぱらお母さん役。hを通してYに伝えてほしいと伝えるがYが拒否するとあきらめる。
Xへへびを演じて、自分はこわがる夜になる。落とす次を懸っているのをXが見ていると「見たら、あかん殺すぞ」と攻撃的なことをい。	17	ゴルフのたまを、Yの方向に打とうとしたり、玩具を獲しにいったり、なぞあてをさせたり、へびでYをおどかしにいったり、何度もYに働きかける。こはんを作ってYの指人形に食べさせる役をする。
Xがhに「すってんこで頂まる」というのをい、 「変わった人やなあ」とひとりごと。		

表-6 第4期

Xについて(Yとの関係)	周 知	Yについて(Xとの関係)	備 考
主にhに関心をかけている。	18	hとXとの間で行なわれている、カルトラマン、動物玩具の戦いに、別の遊びをしながら、行司として声をかける。Xが勝つ「Xの勝ち」とい。	Z欠席、Yの行司あそびのことばの中に、Z力士がでる。
Xがhに大きい声でおどかすのを聞きYが、「やめろ」と言う。Yは「はななくそじい」などことばで相手にやり返す。	19	hとXで行なわれる「すも」の形をとった玩具の戦いに注意深く聞き、い、「Xくんの勝ち」「Xくんがはなれ」と声をかける。Xが、hをおどかす声に、「やめときなさい、そんなん」「Xくんらしいや」と言う。Xがhに「ふすいボイ」といっているのを聞き、「Xくんのあひさん、ボイ言うな、ふすい」と聲やりを人れる。Xとhの活発な動きに誘発され、ボクシングしようとする。	「Zちゃんまた、遅い」と言う。
hとYの間でかわされる話を聞き、ことごとくまねて笑う。Yを茶化す。楽しそうである。	20	hとXに、すもやれとい。自分は横で「かんはなれ、かんはなれ」と声をかける。	Yのあそびの中のヒーローの乗るの中に、Xとともに、Zも含まれている。
Yがhと話すことはまねる。余裕のある関心。しかし、hとの野球にYが割り込んでくると、野球を続けたい。黙ってYにゆする。しばらくから見てい。	21	Yに対するXからの茶化しにははたステリタにならずに聞いている。	
Yに野球に勝つ見せ、刀を切られたり、ピストルで打たれたりするが黙ってそのまま、hの方に寄って来て、助けを求めるそぶり。 Xのしていた野球ボールがhをはねる。 Yが「砂かきなさい」といってX「かかてないよ」とhに言う。	22	hとXの野球に「ボールかき」をいって、自分でひときり興じた後Xと交代。 ボクシングをhに要求。	
Yが「おこふんじやった」と歌うと、「おこふんじや」とからかう。Yが野球の交代を申し出、XがバットをとるとXは野球をしたいのにとられっぱなし。Yがやめると再開する。	23	hとXの野球が気になる。ついに自分から交代を申し出る。 Xとhの野球の領域の真中に、くだもの玩具を散らしたり、スポーツカーに乗って回る。	
Yとhの話聞いて、ちょっと半分で、くり返したり、「何が?」と話の内容をたずねたり、Yに「くそじい」、「はななくそじい」と呼びかける。 Yがよく言っていた「おっぱいちゃん」をからかい半分はhに言う。 Yの関心を早く終めると、「はななくそじい」と、腹立たからうたう。Yは「はななくそじい」と強く出る。野球ボールがYのところに落ちていかにいうに、「あ、おこふんじや」とhに端によるように指し、野球を続けるために配慮。	24	Xがhに使うことば、「おっぱい」をYが言う。Xもまねて2人で笑う。 Xが「おっぱいちゃん」を使うと「何がおっぱいちゃん」とい返す。 Xのふざけ半分のYに対する話しかけには反応しない。	
playroom入室後、Yのそばに自分から近づいていき、話しかける。 自分から近づいたのは、はしめて。 Yが、野球している横で絵を描いていると、バットを早めに出てきたらないう配慮。	25	「Xくん、おえちゃん(hのこと)にチューやれ」と自分の気持ちをXに代えて表現。 野球ボールが飛んでくると「やめとけ」とい。一度、飛んできたボールを玩具の中にかくす。 野球するXのそばに近づいていて横で絵をかく。	

かけたくなるような気持ちを起こしているのが、はからずも、示されているように思われる。そして、hを相手に野球する時などは、Yにボールがあたらないように、hに、端によって野球をしようと提案したり、Yが近くにいと、ボールがあたらないようにしたり、自己の遊びを継続させる上でも、Yへの配慮を向ける面がみられるのである。

なお、母親の話によれば、日常生活場面においてもXは次第にエネルギーが子どもに変化していったとのことである。

(2) Yについて

次週のtherapyの日を正確に言い、時計を読んで、終了の時間をきつと言うなど、知的には、特に問題を感じさせないYであったが、他児と適切なかわり方ができず、自分の感情をスムーズに表明したり、相手に伝えた

ることができないのが彼の特徴であった。初期、Yは他児にはほとんどといってよいほど無関心で自分の遊びと、hに対する関心でいっぱいである。他児を見つめる余裕はなく、他児に怒鳴るなど排他的であった。しかし、自分のほしい玩具を他児が使っていたり、もっていたりする場面に出くわすことが数回あった。そんな時のYは、自分の気持ちを相手に伝えられずに、玩具を持っている他児のまわりをそわそわうろうろし、「～ないなあ」「～どこや」とひとりごとを言って、「ねえちゃん、～どこや」と、hに、助けを求める。そしてついには、バットと他児の玩具を取りあげるのである。しかし、そんなYに対しても、Zはいっしょに遊びたい気持ちが強く、Yに積極的に働きかけていく。たとえば、Yの捜している玩具をすすんで自分も捜し、みつめてあげたり、自分の持っている玩具を、Yが欲しそうにしてると、譲

たり、またYに「何持ってると思う?」と、なぞかけをして当てさせようとしたり、などである。Zのこのような働きかけに対して、Yは、最初はどう受けとっていいか、わからず排他的にヒステリックに怒鳴るのが、精一ぱいであったり、とまどって、まとはずれな答をすることもあった。しかし、受身的に応ずるだけでなく、「おっぱいちょうだい」とか「Zちゃん、おかあさんみたい」とつぶやき、hに向いていた甘えの気持をZにも示すようになる。二人は「平行遊び」から「ごっこ遊び」ができるようになってくる。Zのままごと遊びの中に、指人形を使って入っていく。そして「ごはんを食べさせてもらうバクちゃん」を演ずる。このようにZに対して、次第にかかわるようになっていく。しかし、自分の思いどうりにいかない時もある。Zと買物かごの取りあいになった時、「こらかせ、バクちゃんのカゴや返せ」と怒る。Zが返さないで、今度は、「バクちゃんは昼寝する、もう!」としりぞくが、またつかつかと取りに行くのである。その後、Yはまた、ごっこ遊びにはいっていき、自分から、不自然な形であるが、「おつりなんは」など遊びをひろげていく。Zへの態度は、ambivalentで、拒否的であるかと思うと、甘えていったりなどである。そして、Zとうまくかかわれない時、hの方に、助けを求めにくるのである。このようにYにとって、Zは、強い影響をもった存在であったといえるだろう。Zが欠席するようになってからのYには、Zほどではないが、Xとのかかわりが見られるようになる。hとXの間で行なわれる玩具を使ったかかわりを「すもう」と見立て、自分は、ブラレールで遊びながら、離れた所から、行司として、声をかけるだけではあるが、hとXの遊びに興味をもっている。見ていないようでも、どちらが勝ったかを正確に言うあたりでは、Yの関心の深さが、うかがえるのである。またXに対して、「がんばれ、だんな」「がんばれ、Xくん」と声援も送る。後期、hとXが野球をしていた時、やりたくてたまらないYは、最初、hBとhCの交替を言いつける。そして、次には「忍者部隊月光」(テレビ映画の主人公)と自分を称し、Xのもつバットと、hの持つボールを刀でたたきにいき、2人の野球を切りくずしにかかる。そして、ついには、Yは「僕にも野球やらせてよ!」と、Xに交替を命令し、バットを取るのである。Yと他児とのかかわりは、このように徐々に変化しつつあるが、まだまだ表面的な感じがぬぐいきれない。

初期、Xの攻撃的な行動は、他児には向けられないものの、騒々しい音の源であったり、乱暴な感じのすることが多く、Yは、ヒステリックに、「やめろ!」と叫ぶ

ことがよくあった。しかし、後半は、Xを非難することがほとんどなくなる。これは一つにはY自身の内的変化によるのかもしれない。また他児に対して、間接的にはあるが、自分の強いことを示すXに対して、「Xくん、もうすぐ父ちゃんになる」などつぶやくYであったが、Xは、一方でYの同一化の対象となっていたとも考えられる。

本児は、情緒の安定とともに、学業にも力が入るようになり、科目別に原学級に参加して授業をうけているのだが、その数や時間が次第にふえてもそれに適応していきけるようになった。

(3) Zについて

ヘビ玩具をもっているXを見て、オーバーにこわがって逃げてみたり、Yに玩具を渡しにいったり、他児に興味をもち、積極的にかかわってこうとするZであった。hに攻撃的なかかわりをするXや、「おっぱいちょうだい」とhに甘えの気持をことばで表現しているYをみて、「わからん、なんでかな」とつぶやいたり、時間になっても退室しないXに、「帰らなかつたら、終れへんよね!」とhに言いながら、自分もひきこまれて遊んでいたたり、他児の多様な動きに対して、自分の思ったことを臆することなく、言ったり、行動したりする。そして、他児に、違和感をもちながらも、遠慮なく他児にかかわってこうとする。他児のplay roomの中での特異な行動や、hへのかかわり方を見て、それを理解しようとしたり感じようとしたり、評価を加えたりする意欲がある。回と共にZ自身もしだいに、自分なりにplay roomを使おうとするようになる。最初は、ひとりでままごと遊びをしたり、玩具そのものに興味がいったいのZであったが、hに刀で切りつけにきて、hと積極的にかかわり、hに受け入れられようとするようになる。また、ままごと遊びから、赤ちゃん人形を抱いて、母親となったり、ゴミ箱に水を入れる、ウルトラマン人形を砂にうずめてお墓をつくる、落し穴を掘るなど、単に「遊ぶ」という形にとらわれない、Z自身の内的世界を表明しているような、象徴的な行動が見られるようになる。一方、他児との関係の中では、自分から、ある役割をもって接するのが、Zの特徴であった。その役割は、相手によって変わっていた。Yとの関係の中では、ごっこ遊びの中で、「私、おかあさんよ」と、母親役となり、Yの指人形にごはんを与えたり、買物に出かけていったり、赤ちゃんにミルクを飲ませるなど、忙しく動きまわる母親を演じていた。そして、Yの自己中心的なZへの要求を受け入れ、許容的な態度で接していた。Xとの関係では、「良い子」の役を演じる。Xの一見、はみ出し

ような行動をいましめ、Xがhに攻撃的になると、「ダメよ、悪いことしたら」と、仮面ライダー（テレビ映画に出てくる怪人）のヘルメットをかぶって止めにいたり、Xが、いたずらをするのをやり返すZである。反面、Xが野球でボールを上手に打つを見て、「ワーすごい」と喜んだりする。このように、Zは、他児との関係の中での役割を生かして、様々な自己表現をしていたと言える。最後に、Zが第18回以降中断したことについて考えてみたい。来談時の母親の訴えの大きな点は、学業の遅れが目立つので、養護学級に入れたいということであった。しかし、父親や母親に次第にその意識がなくなり、「そんなこと、言いましたかね」と忘れていくほどで、一つには当初の問題が気にならなくなったためと推測できる。X児やY児を知ることで、それまで一方的にZ児のあり様を重大視していた両親の、子どもに対する見方が変わったともいえる。また、普通学級の友人の間で、赤ちゃん扱いされていたZ児が、このグループの中でのびのびとふるまうことによって、日常の友人関係を作りなおすことができ、play roomと決別し、新たに再出発していった結果とも考えられる。しかし、hから見ると、終結というよりは、clがこれから大きな仕事に取り組むところであったという感が強く、休憩という感じもしないではない。

4. まとめ

以上、集団遊戯療法の過程におけるX、Y、Z 3児の具体的な姿について要約し、その変化について述べてきた。他児への働きかけが比較的多かったZのようなclは、グループの活動力を促進し、他児に与える効果的な影響も大きいといえる。自閉的な傾向をもつYは、グループに参加したことで、hにのみ向けていた関心を他児とhとの関係、ひいては他児の動きへと向けるようになった。また、Xは攻撃的な行動が多かったが、これはもっぱらhに向けられており、他児に直接害はなかった。さらにXは、YやZに比し年長で、思春期の子どもであるが、そのために一層倍加されていると思われる恥らいや照れる態度が、グループの中の他のメンバーの卒直な言動に接することで緩和されていたと思われる。年令の相違よりも精神発達面で、同程度であった3児のグループ構成が効を奏したのであろう。さて、X、Yは男児、Zは女児という男女混合グループであった点については、クライアント同士のかかわり方にあらわれているように、女児であるZの遊びにYが興味をもって参加したり、野球などの活動的な遊びにZ自身、積極的に参加したり、Zが活発であったせいもあり特に問題はなかったと思われる。

II. 治療理論の検討と若干の問題

この項においては、主としてtherapistのよって立つ理論的立場——来談者中心療法が、グループのメンバーの成長に貢献し得たかどうか、集団療法の特質として諸家が指摘する事柄がわれわれの事例ではどうであったかを、具体例を引用しつつ検討したい。また、本事例を通してGroup Therapyに関する若干の問題について考察してみたい。

1. therapistの立場と治療効果

Axlineは八つの基本原理を掲げているが、われわれはその中から、その特色がよくあらわれていると思われるものを以下の四項目にまとめ、各々について本事例の実際と照らしあわせて検討を試みた。

(1)「ラポートの確立、および自由な雰囲気」をめざすことについて

Axlineは次のように述べている。「いろいろな方法で反応する子達が他にいるということは、ラポートを高めるのに有利である。先に余計に表現しがちな子が動いている間、はにかみやの子は、場面の安定さのためしてみる⁽²⁾」。「自分達の表現していることが、hに難なく受け入れられるのを見て…ほかの子がhのおおらかさを見ごとに処理しているのを見て、自分の活動への勇気をわかし、表現の自由がだんだん広げられていくように思える⁽³⁾」また、Ginott⁽⁷⁾は、「他の子供達の存在が緊張を柔らげ、活動や、参加を誘い、容易に治療家を信頼しはじめる」と述べている。

Yがしきりに、hに、プラレールつなぎを手伝うように言う。hは、時々、じっとしているXの傍にもいき、玩具の動かし方などの説明をする。Yは、何度もhを呼びよせる。やがて今度はXの方が、最初は遠慮がちだが、玩具の小片を投げる方法で、自分の方にもhを向かせようと、積極的になりはじめる。

Y「ねえちゃん」と、hにおんぶされにくる。Zは、それを見て、最初は、「かわいい」やがて、「おりろ、おりろ、するいぞ、Zもしてもらおう」とhの方にやってくる。

clとあたたかい親密な関係を作りあげるよう、各々のhは、ことばをしゃべらぬ子、動作の少ない子にも注意を怠らず、cl一人一人に対して、適宜ことばや態度を吟味しつつ働きかけていった。こうしたhの努力とともに、他の子どもとhとの関係を目のあたりに見たclたちは、比較的容易に、おそらくは個人療法を試みた場合よりも一層早くhたちと信頼関係を確立し得たといえる。therapyの場の自由さを味わい、各々独自の方法で自分の気持ちを自由に表現しはじめたclたちは、日常生活場面では見られぬエネルギーを発揮するように

なった。

次に、therapy の過程の中で、新しく体験した自己を、*cl* は、*th* だけでなく、グループの中の他の *cl* との関係でも、ためすようになる。

感情表現が豊富になったXは、野球をしながらも、ことばが口をついてでる。それにともなって、Xから、Yを相手に（ことばの上であるが）働きかけが見られる。*th*とYの会話をことごとく後ろについて、まねてみたり、Yを茶化すなど。

Ginott は⁽⁸⁾、これを現実検証の機会であるとし、「治療的雰囲気のもつ安全さの中で、子ども達は、まともに正直に他の人と、面と向かうことができ、他人との間に、情緒的親密さを経験することができる。」と言っている。

このように、*th* がこころがける *cl* とのおおらかな人間関係の確立は、特にグループの場合効果的であると思われる。それは同時に、2人以外の人間関係にも拡がり、かつ深まっていく。*cl* たちは therapy の場において一層確実に表現の自由さを味わい、それと共に新しい自己、新しい人間関係を創ることができた。

(2)「受容、および感情の認知と反射」をこころがけることについて

Axline⁽⁴⁾は、声の調子とか、応答の公平な配分を考慮することが、Group Therapy の場合、*cl* に、自分は十分受け入れられているということを感じさせるために重要であると説いている。本事例の場合、特に第1期、*th* をめぐってXとYが対立した時など、*th* のなし得ることは、できるだけどの *cl* に対しても心を配り、各人の感情を的確に把握することであった。それは *th* の身体表現（*cl* の遊びに参加することなど）には限界があっても、*cl* の感情の動きには *th* が十分共感しているのだということを *cl* にわからせるのに役立った。さらに、このことは、*cl* 自身が自分の感情の動きを認知し、それを積極的に展開させていくことにもつながっていったと考えられる。

Yは *th* に甘えたい時、傍に来てもらいたい時、しきりに、「ねえちゃん、ねえちゃん」を連発する。「おっぱいちょうだい」とも言う。回を重ねるとともに、Yは「ねえちゃん、ハイ」と一人二役を演じ、鼻鳴のようにそう言って一人で遊ぶことができるようになる。

Group Therapy の場合は、またほかの子が参加することによって、個人の therapy では表現できないような感情を *cl* が出すことがある。Axline は⁽⁵⁾ 「グループダイナミックスは、ある子どもと、ほかの子どもたちとの関係における問題点を集点にもってくることがある。」と言っている。*cl* の感情体験場面において、*th* が、*cl* の表現している気持を了解し、共感するならば、*cl* は、

他児との関係の中でも自己への洞察が得られるだろう。Ginott は、この点について⁽⁹⁾ 「集団の経験は、考え方や、感じ方の相互の刺激が、深い洞察を表面にもち来すのに力がある。」と述べている。

Y「Zちゃん、おっぱいちょうだい」Y「Zちゃん、赤ちゃんにおっぱいのました1時の時…」とひとりごと。*th* 「Yくんは、Zちゃんが好きなやね」Y「Zちゃんお母さんみたい」Z「だってね私、お母さんだもん」Y「Zちゃん買物にいけや」Zは買物かごを取ってきて買物にいく。

cl は、「何か」になりたい気持から、「何か」の役割をとって演ずる。そして、役割を選択してふるまうことにより、自らの成長に役立てていくこともできるし、他の *cl* の演ずる役割を通して、*cl* にとって重要な対象への感情を表現することができる。*th* が、*cl* の表現している気持を受け入れる時、*cl* の内に、よりいっそう新しい経験が起こってくるように思われる。

(3)「*cl* の先導、および *cl* に尊敬心をもち続けること」に徹する

Group Therapy においては、プレイの場は時を経ずして *cl* 同士の人間関係が「先導」していくことになりやすい。*th* は *cl* たちを見守り、主として（1）および（2）の項目に関して併わせて心を配れば良いと思われる。実際、本事例の場合など、*cl* 一人一人がその個性を発揮した遊びを展開し、独自の表現をするので、*th* としては、*cl* を了解し受け入れることに精一杯で、先導を試みるいとまはなかったといえる。「グループのもつ治療力」が注目されるのは、therapy の場においては複数の人間関係が、治療を展開させるエネルギーを必然的に内包しているからであろう。さて、*cl* に尊敬心をもち続ける、いいかえれば *cl* を尊重する、ということについてであるが、これは *cl* の先導にまかせるという立場の基礎になる *cl* の見方、人間観である。*cl* が子どもの場合、そして特に本事例のXのように非常に攻撃的な子どものような場合、*th* はこの態度をおびやかされがちである。Xが執拗におこなう *th* への攻撃や罵倒の数々は、Xが既に成人に匹敵する背丈の大きい子どもであるだけに、女性の *th* にとっては（*th* はいずれも女性である）時に脅威的であった。ところが、グループの中では、そのようなXの態度に対しても臆することなく働きかける他児がおり、他児に対しては遠慮したり優しい配慮をみせたりするXの別の一面が見られた。本事例の場合、Xがグループの一員であったこと、および co-therapist システムをとり、*th* がもう1人の *th* と支え合いながらXの行動の意味を考え、臨機応変にパストタッチをしてXにかかわっていくという方法をとったことが、結果的にはX自身に

も転機をもたらす場合があり効果があった。1人のthあるいは個人療法では基本原理に徹することが不可能かと思われる場合であっても、グループではその利点を生かし、危機をのりこえることができる場合がある。

(4)「治療的制限」を設けることについて

「子どもの気持や態度が、ことばや遊びを通して表現されるとき、子どももthもその経験を客観的に見ることができる……もし、言語や象徴の要素がとりのぞかれたならば、行為に表わしている態度や衝動は、子どもにも、またthにも受け入れられないかも知れない。こうした状態に達するに必要な制限が、治療を満足させる必須の条件としてもうけられる」Axlineは制限の意義についてこのように述べている。われわれも、彼女に従って、制限は最少限にとどめた。その一つは時間の制限（1セッション50分間）であり、もう一つはPlay roomの機能の停止をもたらすような構造上の破壊や玩具の持ち帰りの制限である。thへの身体攻撃に関しては、本事例のXのような児童の場合、意味のある攻撃活動（Xはことばではうまく表現できない。X自身身体が大きいため、thへの身体接触がどうしても攻撃的な感じになってしまいがち）が多いのでわれわれとしては一律に制限することは避け、対応するthのその時その時の判断に依ることとした。また、最初からこれらの制限を宣言するのではなく、制限が必要な場合にのみ与えることにした。また子ども同士の間にも攻撃活動がみられることがいくつかあったが、それは危険を感じさせるものではなかったので制限は考慮しなかった。

グループの特色として、子ども同士が制限し合うことがあげられる。Yは毎回入室時に自分で時間を決めて「今日は〇〇まで」といい、その時間になると帰ろうとする。一方Xは往々にして退室をしぶり、「晩までいる」という。各々の不合理をもう一方の子どもが指摘、相手を非難するし、Zもそれに加わる。おたがいにこの問題に参加することで、子どもたちは自分と他児の違いを認知した。thへの身体攻撃についても、Xに対し、他児が「やめろ」と制限を加えにくる。Xはその中で自分の立場をもう一度考えなおさざるを得なくなる。Group Therapyにおいては、ここでもまた複数の人間関係ということが治療の意味をもって登場してくることになる。

2. Group Therapyの問題点

(1) セラピストの問題

集団遊戯療法は単独のthが担当する場合と、2人あるいはそれ以上のthが担当する場合がある。後者の場合、thのチームワークが重要となる。clに対する共通した理解と、thどうしの相互理解は治療の進展に欠かすこと

ができないものである。複数のthが複数のclと接するtherapyでは、全体の雰囲気とcl一人一人の反応を敏感に把握し、それらに即応できるthの態度が要請される。thはまた、clに対するのと同様、他のthの動きに対しても許容的でなければならない。集団療法は、時によればclの動きがバラバラで、thが各々に振り回されるような場合があるが、thとしてはそのような一貫しない人間関係にも耐えていかねばならない。この点、clとじっくり取り組んで、長時間の粘りで治療関係を展開させていくのが得意なthには集団療法は不向きであるといえよう。集団療法のthは、場の雰囲気の中から生まれるものをみつめ、集団の中から治療力が育ってくるのを「待つ」ことのできるthでなければならない。

さて、幼児のグループの場合など、1人のthが全体を注目し、もう1人がグループから逸脱しがちな子どもを注目していくという任務分担をおこなっている場合があるが、本事例においては、われわれは2人のthが参加する場合、特に役割を決めず、各々のthが臨機応変にどの子どもにも接触していくことにした。2人制の利点としては、clの活発なエネルギーに一人のthが対応しきれなくなった時、バトンタッチが可能なこと、複数のclの同時多発の働きかけが見逃されずにthによって受けとめられやすいことなどがあげられる。いずれにしても、thの資質、thどうしの信頼関係など、thの問題が集団療法の成果に大きく関係してくる。

(2) グループ構成の諸条件について

グループを構成するにあたっては、clの数、性別、IQ、年令巾、主訴、問題性の深さなどが考慮される必要がある⁹⁾。一方、施設およびthなど受け入れ側の条件も忘れてはならない事柄であろう。本事例の子ども数は3名（男2、女1）、年令の中は10歳から13歳と諸家の説よりやや広い。子ども数はもう1名ふやしたいと思っていたが、適当なclがみつからなかった。しかしながら、結果的には本事例のような年令層の子ども達にはわれわれのところのplay roomは3名が限度であると思われた。

次に、学童期以降の子どもたちは同性ばかりの集団が良いとGinott¹⁰⁾などが述べているが、本事例では女兒であるZが他の男児にこだわることなく積極的に働きかけていったこと、また男児の方は自己の男らしさ、強さを誇ったり、母親的役割の対象としてZを見たりなど意味があったことを考えると、混合集団も考慮されて良いと思われた。

最後に、年令の点であるが、本事例の場合、clがいずれも主訴は異なるが知恵遅れの子どもばかりであり、その知的発達がほぼ同程度であったことや、年長のXが他

のメンバーに満足していたことなど、やはり結果的にはその差は特に問題ではなかったと思われる。グループ構成の諸条件は、therapyの展開前に考慮することであるから、実際にはその後不測の事態が生じる場合もあり一概に規定することはむずかしい。諸条件の整備にあたっては、従来の仮説に全面的に拘束されずに実践してみることが大切である。

(3) 親のカウンセリングについて

本事例では、子どものグループと同様1回50分間親たちのグループカウンセリングが平行しておこなわれた。XとYは母親が、Zは両親が参加した。各人の年齢は30代から40代でその年齢中では10歳以内であった。母親の問題意識や動機付けのレベルの違い、主訴の違いが、カウンセリング場面での発言内容や態度の違いにあらわれ、子どものtherapyの発展に比し、グループカウンセリングはダイナミックな進展を示し得なかった。

Xの母親は知的な洞察力は優れているものの、実際には柔軟な態度をとり難い性格であった。

彼女はグループの中ではカウンセラー的役割をとり、常に他の親たちに気を配っていたが、そのことがまたこの母親の態度を息苦しいものにしていたと思われる。ある宗教の布教師としての彼女の一面が、カウンセリング場面でも彼女の意図(すなおな気持ちで自分を見つめたい)とは逆に彼女を制し続けていたといえる。一方、Yの母親は自らが病弱のせいもあり、来所にはあまり熱意をもっていなかった。Yのエネルギーにひきずられて来所しているといった感じが強かった。彼女は一人息子のYに対して確固とした養育態度をとっておらず、盲愛するばかりで親としては未熟な点が多かった。Yに対する理解もあいまいであり、カウンセリングの時間そのものも彼女にとっては深い意味をもつものにはなり得なかった。Xの母親から子どもの養育に関してさまざまな情報提供があったが、Yの母親に効果があったかどうかは疑わしい。次にZの母親は、来所日が偶然に商売の休日であったため、父親が車で送迎し、そのまま夫婦ともカウンセリングに参加することになった。父親の参加は必ずしも毎回ではなかったが、夫婦一緒の際は、継母である母親の発言は少なかった。この両親が初回来所時からくり返し述べた「Zを養護学級に入れない」という訴えは徐々になくなり、彼らはそういう気持ちをもっていたことすら忘れるようになった。また、Zの問題が他の2人に比し少なくとも表面的にはさほど深くないこともあり、一家は途中から来所しなくなった。その後、何度か連絡をとったが、来所の意志がなくなったわけではないものの、休日のその日を一家でのんびりと過したいという気持ちが強

く、来所を再開するには到らなかった。

本事例は、子どもの側の条件によるグルーピングが必ずしも親のグループをも満足させるものではないことを示していると思われる。子どもの問題をもって集まったという点では共通であるが、親という成人グループではメンバーの問題意識のレベルや生活態度の差があまりにも大きい場合、カウンセラーの力ではいかんともしがたい障壁となるのかも知れない。もちろんカウンセラーの力量不足ということも考慮しなければならない。親のグループカウンセリングに関しては稿を改めて考察しなければならないが、いずれにしろ山松ら¹³⁾の指摘する母子関係は、本事例の場合、clの違いとも関連するが、大きく関与していたとはいえなかった。

(4) 集団療法の「期間」について

継続治療の場合、一般的には治療期間をあらかじめ決めておくかどうかについては議論があると思われるが、集団療法の場合は暫定的にせよ期間を決めておいた方が良いというのが筆者の考えである。特に閉鎖集団の場合、同じグループのメンバーになった者どおしがある一定の期間は継続して週に一回なら一回、共に期間を過すのだという期待をもって集まることができる。本事例では、Intakeの際にこの点があいまいであったZが中断し、グループ全体から見た場合損失であったといえるし、病弱で通所困難をとまなうYの母親がとにかく一年間は、とがんばり続けたことがYにとっては幸いであった。ちなみにXはこのグループ終了后あらたに他の子どもとグループになり再スタートしている。

集団療法の場合はclどうしの関係が治療の成果にも大きく関係してくるから、グループのメンバーが一定期間継続してtherapyに参加するということが必要である。cl一人一人の成長の度合には個人差があるから、全員に最適の治療期間というものを決めることは困難であるが、期間の更新ということを前提にすると、一定の治療期間を設定することが効果的ではないかと筆者は考える。

3. まとめ

以上、われわれの経験を通じて、集団遊戯療法を効果的におこなうための検討を進めてきた。

来談者中心療法は、集団療法に適用された場合、グループ・ダイナミックスが作用して独自の治療効果を発揮する。それは本事例のclたちが有したような情緒的な問題や社会的適応の問題に力があるといえる。

複数のclと場の雰囲気に対して、敏感に即応できる態度がthに要請されるが、co-therapistシステムをとり入れるなど、thの側の体制を整え、理論的立場に徹する条件作りも考慮されて良い。さらに集団療法を実践

するにあたっては、グループ構成に配慮することが重要であるが、治療の継続とともに予期せぬ問題も出現するから、新たな *th* や *cl* の導入、治療期間の設定、個人療法への切り替え、個人療法の併用など、柔軟な対応も考える必要がある。

要 約

集団遊戯療法の理論と実際を考察するにあたり、知恵遅れで、対人関係および情緒的な問題を併せもつ3人の子どもの25回にわたる集団遊戯療法の過程を資料とした。分析は主としてグループ・ダイナミックスに焦点をあてた。また、*th* の来談者中心療法の立場が実際の治療過程の中でどのように生かされ、効果があったか、および集団療法の問題点などを検討した。

文 献

- (1) Axline, V.M.: Play Therapy, Boston, Houghton Mifflin (1947)

- (2) Axline, V.M. 小林治夫訳：遊戯療法，岩崎学術出版社，112 (1972)
- (3) Ibid., 129-130
- (4) Ibid., 122
- (5) Ibid., 160
- (6) Ibid., 175
- (7) Ginott, H. G.: Group psychotherapy with Children, McGraw-Hill 3-4 (1961)
- (8) Ibid., 11-12
- (9) Ibid., 9-10
- (10) Ibid., 34-35
- (11) Hobbs, N. 畠瀬稔編訳：プレイグループセラピー，集団管理（ロジャース全集第7巻）岩崎学術出版社，131-132 (1967)
- (12) Rogers, C.R.: Client-Centered Therapy, Boston, Houghton Mifflin (1951)
- (13) 山松實文・並河信子・丹下庄一・鈴木節子：集団心理治療に於ける母子関係，本紀要第12巻 (1964)

Summary

In this paper, it is intended to introduce the process of the group play-therapy for three children who have mental retardation and emotional disturbance simultaneously.

From the standpoints chiefly of group dynamics and therapist theory (client-centered therapy), this process has been analysed and investigated.